保育エッセイ

保育の世界を豊かに生きる子どもたち④

「会話すること」と「みんなの前で話すこと」における子どもの生

榎沢良彦（大学教員）

幼稚園・保育所から小学校への接続が強調されるようになり、保育において「言葉で伝え合うこと」や「みんなの前で発表すること」が意図的に行われるようになってきた。これらのねらいは、コミュニケーションの能力を育てることにある。確かに、これらの取り組みにより、子どもたちは上手に発表することができるようになる。しかし、そのことが、子どもたちが仲間とのかかわり（言語生活）を生きることにどのような意味を持つのかについては、ほとんど意識されてはいない。果たして、子どもたちは、人に話すことや人の話を聞くことにおいてどのような体験をしているのだろうか。今回は、遊びの中で友達と話すこと（会話）とみんなの前で話すことを取り上げ、体験の相違を考えてみたい。まず、ある幼稚園の年長児クラスでの出来事を紹介しよう。

この日、子どもたちは「フェスティバル」のテーマの下にそれぞれ遊んでいた。室内では

榎沢良彦（えのさわよしひこ）
東京家政大学家政学部教授 。
保育の世界を当事者がどのように生きているのかを考えています。著書：『生きられる保育空間』（学文社）。

「編み物」「映画館ごっこ」、外では「玉乗り」「ブーメラン」「的当て」などが行われていた。テラスで、K夫とM子が玉乗りをしている。M子のほうが長い時間やっており、K夫は待っている時間が長い。しかし、身体は玉乗りコースの上にあり、M子と会話している。M子には交替したくない気持ちもあるのだろうが、K夫に「一緒に乗ろう」と誘い、二人で玉乗りをする。しかし、無理だとわかり、K夫のほうが降りて待つことになる。

「お知らせタイム」になり、子どもたちがテラスに集められる。担任が子どもたちに「みんなに知らせたいことのある人は前に出て言ってください」と言う。最初に、T夫が前に出てみんなの方を向き、「あそこで玉乗りをしているので来てください」と言う。表情は硬く、いかにも緊張している様子である。流れるような話し方ではなく、ぎごちない感じである。座って聞いている子どもたちの中には、隣同士でしゃべっている子どももいれば、注意を向けて聞いている子どももいる。N夫は「今度玉乗りに行こう」とつぶやく。T夫に続いて、他の子どもたちも、自分の遊びを実演して紹介する。やはり緊張した面持ちである。一方、見ている子どもたちはリラックスしている様子で、誰がうまいとか下手だとか、気楽に実演を評価し合っている。「お知らせタイム」が終わると、それまで人気のなかった「映画ごっこ」や「玉乗り」に子どもたちが集まりだす。

M子とK夫は遊びの中で会話をしている。玉乗りに参加している者同士として、この二人の間には身体的に応答し合う関係が生じている。それ故、二人の間には自然な気持ちの交流が生じる。すなわち、「わかり合う」という事態が生じるのである。二人がわかり合ってい

る故に、M子がK夫に「一緒に乗ろう」と誘いかけることが起きるのである。この言葉から、M子がK夫の気持ちを察していることがわかるが、それは知的判断によりなされたわけではない。気持ちの通じ合いを通して、K夫の気持ちがM子にじかに感じられるのである。「一緒に乗ろう」という言葉は、気持ちの通じ合いの中から自然と口をついて出た言葉なのである。

このように、遊びの中でなされる会話においては、子どもたちは自然な流ちょうさの感覚をもって、相手に対して言葉を発することができる。ところが、人の前に立って話をすることになると、会話におけるのとは全く異なる事態が子どもの身に生じてくる。

「お知らせタイム」で、みんなの前に立って遊びを紹介する子どもたちは、座って聞いている子どもたちとは全く異なる在り方をしている。話し方はぎごちなくなり、身体全体が緊張感に満ちている。緊張した身体は相手の身体に対して柔軟に応答することはできない。それ故、身体的行為である話すことも、不自然なものになるのである。

みんなの前に立つ子どもの行為が不自然になるのは、みんなに見られているからである。見られることにより、子どもは「他者に見られている自己」を意識する。それは、相手と自分とが「見る主体」と「見られる対象」とに分離されることを意味する。対象化された子どもは見る主体により拘束され、自由に存在する権利を奪われる。それ故に、みんなの前に立つ子どもは、聞いている子どもたちとの間で自然な会話を楽しむことができなくなるのである。それに加え、次の事情が子どもから自然な流ちょうさを奪う。

みんなの前で話をする子どもは、「遊びをみんなに紹介する」という目的を果たすことが

求められる。それ故、その子は目的が達成できるように言葉を考え、選ばなければならない。すなわち、みんなの前で話をする子どもは自分の話し方を意識しながら話すのである。意識された話し方は相手との身体的相互応答の流れから切り離される故に、ぎごちないものになる。

一方、聞いている子どもたちが遊びを実演する子どもを「うまい、下手」と評価していることからわかるように、聞いている子どもたちは前に立っている子どもを対象化して眺めることができる。この時、両者の間には相互に応答し合う関係は生じない。すなわち、話をする子どもたちの生と聞いている子どもたちの生は別々の生として流れるのであり、両者の間に気持ちの通じ合いは生じないのである。それ故、聞いている子どもたちは話している子どもがどのような心情で話しているのか感じ取ることはない。単に、話の内容だけを理解し、情報を得るのである。そして、その情報が興味を引かれるものであれば、子どもたちは行動する。「映画館ごっこ」や「玉乗り」に子どもたちが集まりだしたのは、まさしく子どもたちが情報に興味を引かれたからである。

このように、遊びの中でなされる会話と、みんなの前で話をすることとでは、子どもたちの体験は全く異なっている。前者では子どもたちは共同の生を生き、「気持ちが通じ合い、わかり合っている」ことを基盤として、自然で流ちょうな言語的応答（身体的応答）を展開する。後者では、聞く者が話す者を対象化するとともに、話す者は自ら自己を意識する。それ故に、話す者はぎごちない話し方をせざるを得なくなり、情動的・心情的なわかり合いを欠いた形での情報の授受が展開されるのである。

—終わり—